

# 続・戸塚文子「名張は秋の漂う町」を読む

## 陰翳礼讃

いんえいらいさん

左様にわれわれが住居を営むには、何よりも屋根と云う傘を拵げて大地に一廓の日かげを落し、その薄暗い陰翳の中に家造りをする。もちろん西洋の家屋にも屋根がない訳ではないが、それは日光を遮蔽するよりも雨露をしのぐための方が主であつて、陰はなるべく作らないようにし、少しでも多く内部を明りに曝すようにしていることは、外形を見ても頷かれる。日本の屋根を傘とすれば、西洋のそれは帽子でしかない。しかも烏打帽子のように出来るだけ鏝を小さくし、日光の直射を近々と軒端に受ける。けだし日本の家の屋根の庇が長いのは、気候風土や、建築材料や、その他いろいろの關係があるのであろう。たとえば煉瓦やガラスやセメントのようなものを使わないところから、横なぐりの風雨を防ぐためには庇を深くする必要があつたであらうし、日本人として暗い部屋よりは明るい部屋を便利としたに違いないが、是非なくあつたのもあろう。が、美と云うものは常に生活の實際から発達するもので、暗い部屋に住むことを餘儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至つた。事実、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡に依つて生れているので、それ以外に何も無い。

西洋人が日本座敷を見てその簡素なのに驚き、たゞ灰色の壁があるばかりで何の装飾もないと云う風に感じるのは、彼等としてはいかさま尤もであるけれども、それは陰翳の謎を解しないからである。われわれは、それだけでなく太陽の光線の這入りにくい座敷の外側へ、土庇を出したり縁側を附けたりして一層日光を遠のける。そして室内へは、庭からの反射が障子を透してほの明るく忍び込むようにする。われわれの座敷の美の要素は、この間接の鈍い光線に外ならない。われわれは、この力のない、わびしい、果敢ない光線が、しんみり落ち着いて座敷の壁へ沁み込むように、わざと調子の弱い色の砂壁を塗る。土蔵とか、厨とか、廊下のようなところへ塗るには照りをつけるが、座敷の壁は殆ど砂壁で、めつたに光らせない。もし光らせたら、その乏しい光線の、柔かい弱い味が消える。われ等は何処までも、見るからにおぼつかかなげな外光が、黄昏色の壁の面に取り着いて辛くも餘命を保っている、あの繊細な明るさを楽しむ。我等に取つてはこの壁の上の明るさ或はほのぐらさが何者の装飾にも優るのであり、しみぐらと見飽きがないのである。

（「経済往来」昭和八年十二月号—九年一月号）

たにざきじゅんいちろう  
谷崎潤一郎